

現代社会における宗教の諸相:マレーシア、シンガポールの事例報告を受けて ——研究大会個別報告(前半)——

多和田裕司

2013年度の研究大会では6件の個別研究報告があった。本稿では、筆者が司会を担当した前半3件の報告について紹介する。いずれも問題設定の明快さや綿密な調査手法などに裏打ちされた報告であり、マレーシア研究の深みと広がりを感じられるものであった。それぞれ個別になされた各報告をかぎられた紙幅でまとめることはできないので、本稿では筆者の関心に引きつけて感想やコメントを中心に述べていきたい。なお個々の報告については、報告者ご自身による概要がすでに前号のJAMS ニュースに掲載されているのであわせて参照されたい。

無理を承知で3件の報告の最大公約数をあえて求めると、それは現代における宗教の再定式化とでもいうことになるだろうか。いずれの報告もマレーシア(およびシンガポール)で展開される現代的な宗教のありかたを、鮮やかに伝えるものであった。

お一方目の久志本さんの報告では、宗教のグローバルな展開がマレーシアで近年増加しつつあるスーフィー教団によるマウリド集会を事例に、とくにその指導層のネットワークに焦点を当てながら論じられた。宗教、なかでもイスラームは本来的にグローバルな性格を備えている。それは信者の国籍や民族を問わず、ムスリムであることによって成り立つつながりといっている。ムスリムのつながりがたんに理念によって担保されているだけではなく、知の伝達という微細な実践の積み重ねによって保証されるものでもあることが、報告者の丹念な追跡によっ

てあきらかにされた。スーフィー教団の指導層がイスラーム的な系譜や師弟関係によってつながり、またそれに惹かれマウリド集会に大勢のムスリムが参集する姿は、イスラーム本来のありかたと情報化や輸送手段の進展がもたらしたグローバル化とが切り結んだところに、必然的に生じる現象としてみることもできよう。

しかしたとえどのようにグローバルに展開しようとも、「現代の」宗教が強力に確立された国民国家の枠内を離れては存在しえないことも事実である。周知の通りマレーシアのイスラームは政府によってそのありかたが強く規定されている。そもそもスーフィズムについても、とくにイスラーム復興の時代以降は否定的な形でとらえられることが多い。そんななかでマレーシアという枠を越えるようなイスラームは、果たしてどこまで受け入れられるのであろうか。現時点では政府の有力政治家が儀礼に参加するなど両者の関係はとくに問題がないように思われる。しかし国家のコントロールから逸脱する危険が垣間見えたときに政府が示すであろう姿勢は、かつてのアルカムの例を思い出せば十分であろう。スーフィー教団やマウリド集会に参加する人々の意識が、報告者が言うイスラームの新しい潮流として拡大するのか、それともどこかの時点で国家の枠に回収されてしまうのか、今後の展開が注目されるところである。

お二人目の光成さんの報告は、まさに国家が宗教のグローバル性を自らの枠内に押さえ込もうとす

る瞬間を切り取ったものであった。1950年代から60年代にかけてという、シンガポールの近代国家建設が進みつつある時期においてなされたイスラムの婚姻・離婚にかんする法制定には、国家の論理や「現代的」価値観とでも呼べるものが色濃く映し出されている。

たとえば婚姻が可能とされる年齢にかんして、シンガポールにおいてイスラム以外の婚姻を規定する『女性憲章』におけるそれとの統一化が論じられたことなどに、国民国家としての同一性への希求を垣間見ることができる。さらに報告者によればこの時期の婚姻、離婚の法制化には、イスラムの離婚率の高さを結婚の安定によって解決しようとする意図が働いていたという。そこにあるのは、女性の権利や人権といった、おそらくはイスラームとは別種の「西洋的な」論理であろう。光成さんの報告は、本来時代や地域を超越するものであるはずのイスラームの論理が現代という時代において実践されるためには、イスラームとは別種の論理と向き合わざるえないことを浮かび上がらせている。

三人目の長谷川さんの報告では、宗教(この場合は儀礼)が、それが置かれた文脈が大きく変容するなかで、過去のものとして廃れていくのではなく、なお発展し続ける様子が、民族誌的な事例によって紹介されている。イバン社会では、社会的指導者が軍事的なそれから政治やビジネスのそれへと移り変わり、村落部から町へと移住する住民が増加し、あるいは伝統的な文化や技術が失われつつあるという。そんななかで、1970年代頃までは主として富裕者によって、最高位の儀礼執行者を招いて何日もかけておこなわれていた儀礼がいまや減少し、他方現在はランクの低いとされる儀礼執行者による一夜限りの儀礼の開催が増加している。

しかしこのような儀礼の変容は、衰退としてとらえられるものではない。長谷川さんによれば、希少な存在となった儀礼執行者たちは、たとえばかつて儀礼において機織りの「染匠」(ロングハウスの女性リーダー)が果たしていた役割の代役を担うなど、儀礼の総合コーディネーター的な役割を果たしつつ、高額な謝礼をえるような存在へと変化している。

イスラームとある民族の儀礼、グローバルな性格を備えた宗教と本質的にはローカルな文化に根ざした宗教という違いはあるものの、イバンの儀礼の変容もまた、現代という時代に特徴的な宗教のありかたを示すものであろう。

現在の我々の生がグローバル化や国民国家体制や都市化や消費社会化等々のさまざまな「力」によって形作られているとすれば、それは宗教についてもおなじはずである。地域研究の対象として宗教(宗教にかぎったことではないが)に焦点をあてようとするとき、そこでは当然のごとく、宗教にフォーカスする視点だけではなく、より広角へと拡散する射程の広がりも必要であろう。

ここで紹介したお三方の報告は、地域や対象を異にはしているものの、宗教のグローバルな展開、宗教と現代的な価値との関係性、文化の動態的変容などといった、ある意味で「普遍的」なテーマを、地域の具体的な実践に即して読み込むという点で共通した指向性を有している。その点において、いずれの報告も、マレーシアや広い意味でのマレー世界の現実の詳細をあきらかにしながら、かつより大きな文脈のなかで論じることへと開かれているといえるだろう。おなじく地域研究に従事する者として、3件とも刺激に満ちたご報告であった。